

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

⑮

一九九二年秋、実施二

年目となる「五葉山森林

浴まるごと体験」に森の

案内人として来ていただ

いたのが伊藤正逸さん

だ。岩手県初の公認イン

ストラクターとして活躍

していた。大きな体なが

ら物腰が柔らかく、抑え

た語り口が懐の深さを感じ

させた。

正逸さんは前日、森林

浴道の下見を兼ね、当日

の参加者たちに森の虫た

ちを知ってもらうため

に、あらかじめ虫を集め

る仕掛けを施し「お楽し

み」を用意した。

「どこへ行ってどう

であるが、山が心を開い

てくれるのは、こちらの

努力が必要で時間がかか

る。本番の森林浴では精

霊たちに会うための方法

を織り交ぜながら森を歩

いた」と彼は言う。

森林浴の当日、正逸さ

んは、「お楽しみ」の場

所で身をかため、森に生

きる虫たちのこと、森の

仕組みや営みについて語

りかけていた。森に誘わ

れる思いをこんなふうに

話している。

「土、水、岩、そして

森、自然のすべてのもの

に精霊が宿っている。幼

いころは確か、そんな精

霊たちに会ったことがあ

るような気がする。幼い

娘を抱いて歩いていると

何もない方向を指さし、

笑ったり、声を出したり

することがある。ひょっ

としたら、そこには昔自

分も見えた『木の精』や

『水の精』が微笑んでい

るのかも知れない。私が

山や森に出かけていくの

は、見えないまでも、彼

らの気配を少しでも感じ

たいと思っているから

だ。深い森の湿った空気

の中をさまよっている

と、あのころの澄んだ目

になれそう気がする」

一九九九年十二月十七

日。盛岡の友人からの電

話に私は言葉を失った。

その機会を待つ。

「澄んだ目」で見続け

た十五年。数百年の樹木

一年で世代交代する昆

虫、ひとときの自然の営

みをとらえた霜や水、霧、

水の流れ、さらには一斉

に開花する花々、そのす

べてが正逸さんの見た

「澄んだ目」伊藤正逸さんを偲ぶ

五葉山自然倶楽部事務局長

千葉 修悦

正逸さんの訃報だった。

初七日に五葉山自然倶

楽部代表の吉田繁先生と盛

岡の正逸さんの家を訪ね

ると、仏間の正面に微笑

んでいるいつもの正逸さ

んがいた。柔和な表情は

語りかけているようであ

った。

妥協を許さない自然力

メラマン・伊藤正逸さ

ん。奥行きのある、森の

息づかいを感じさせる写

真集『檀取湿原の四季』

一瞬のシャッターチャン

スを得るために、同じ場

所に何度も通い、じっと

「いのち」の姿であった。

『檀取湿原の四季』の

「あとがき」で、この湿

原に魅了されている様子

が象徴的に述べられてい

る。

「歩き疲れ、森の中に

座っていると、周りの空

気が優しく体を包んでく

れ、すうっと眠ってしま

うことがよくある。ほか

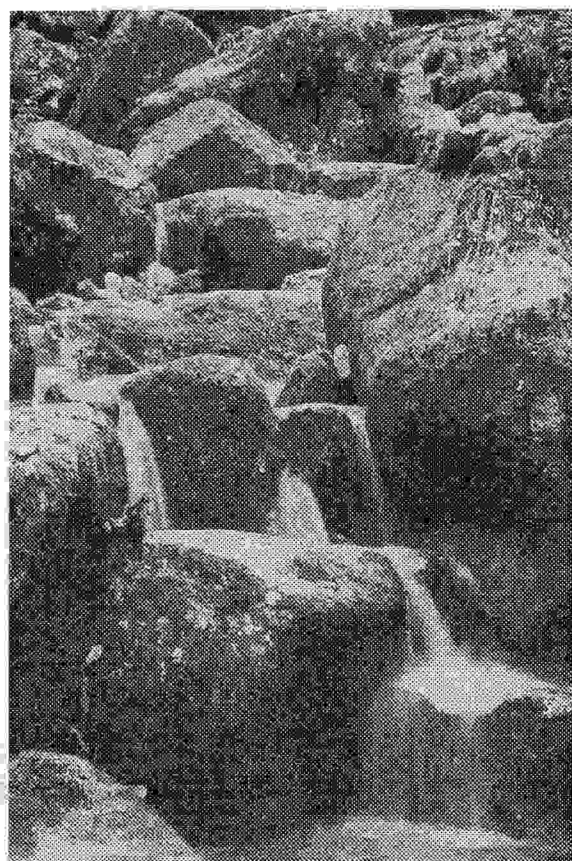
の場所ではあまり経験し

ないことであり、やはり

何か合致するものがある

のだろう」

自然のすべてに精霊が宿するという。人は「木の精」を体感したいから森や山に出掛ける。沢は「水の精」のすみかなのかも



お母さんと、「木の精」
「水の精」と出会って
たかもしれない娘さん
の二人が訪ねていた。「も
う、この痛みはいよいよ
後も見ないで先立つこと
を許して。順序が後先に
なって」。話す方も聞く
方も、どんなにか無念で
あったに違いない。
病院からの帰り際、正
逸さんは小学生の娘さん
の手をしっかりと握りしめ
ていたという。手のぬく
もりの中に、幼子を抱い
て歩いた場面を思い浮か
べていたのだろうか。積
み重ねてきた時間と、さ
まざまな生活空間をとも
にしてきた場面、場面を。
もう二度と見ることも
ないふるさとの山や森、
そして幼子と見たあの時
の「木の精」「水の精」
の心象風景。四十一歳の
若さであった。

私は、五葉山麓の森林
浴道を歩くたびに、人を
包み込むおらかなで深み
のある正逸さんを思い出
す。数少ない出会いでは
あったが、今なお親しみ
のある大きな存在であり
続けている。

【伊藤正逸さんのプロ
フィール】一九五八年、
盛岡市生まれ。山形大学
農学部卒業。高校時代か
ら植物写真を撮り続け
る。本県初の公認森林イ
ンストラクターとして活
躍。九二年秋開催の「五
葉山森林浴まるごと体
験」森の案内人として好
評を博す。九八年写真集
『檀取湿原の四季』を出
版、森の息づかいを伝え
る。九九年十二月十七日
死去。元五葉山自然倶楽
部会員。